

氏名	笹森 博貴
学位の種類	博士 (医学)
学位記番号	甲第610号
学位授与年月日	令和5年3月15日
審査委員	主査 教授 田村 研治
	副査 教授 宮城 聡
	副査 准教授 鞆嶋 有紀

論文審査の結果の要旨

卵巣漿液粘性性腫瘍(SMBT: seromucinous ovarian borderline tumors)は2014年のWHO分類から新設された、比較的稀な腫瘍である。その遺伝子学的研究は世界でも散見されている程度であり、日本人における解析は未だなされていないのが現状である。本研究は、日本人におけるSMBTの遺伝子変異の検索を初めて行うことを目的とした。婦人科病理学者によるセントラルレビューの結果、30症例のうち7症例が除外され、SMBT23症例について検討を行った。KRAS、BRAF、PIK3CA、ERBB2遺伝子の検索はサンガーシーケンスにて既知のhot spotにおける変異を特定し、がん抑制遺伝子であるP53、ARID1A、PTENは免疫染色で評価を行った。KRAS、BRAF、PIK3CA、ERBB2遺伝子の変異はそれぞれ4.3% (1/23)、8.6% (2/23)、8.6% (2/23)、17.3% (4/23)であった。P53、ARID1A、PTENの変異は26% (6/23)、4.3% (1/23)、0% (0/23)であった。既存の報告ではKRAS、ARID1A遺伝子の変異が指摘されていたが、本研究の結果、日本人におけるSMBTの腫瘍形成にはp53、ERBB2が重要な役割を果たしている可能性が示された。既存の報告と本研究との結果の相違は、SMBTの正確な診断の困難さ、日本人と他の人種との人種差の影響が考えられる。本研究の強みは、日本で初めてSMBTの遺伝子検索を行った点であるが、今後は、より多くの症例で、次世代シーケンスを使用したさらなる研究が望まれる。